

# 国語科教育演習 第一回課題

2024/04/19

宇田有佑

## 大村はま(2004)『灯し続けることば』を読んで気になったことば

### 1. 「カンカンで、誰かの手が止まりましたか」(p.16)

自身は中学校での教育実習で指導教諭から、小さなサインを見逃すことが問題行動につながるから決して見逃さず、指導・注意するようにという指導をいただいた。私であれば、注意をしていたに違いない出来事を、芦田は教育効果と子どもへの影響を見極め、何も言わなかった。日頃の芦田の指導の在り方が目に浮かぶようで、その場限りでない指導の在り方を考えさせられるようで気になった。

なお、このことばは大村のことばではない。芦田恵之助のことばである。このことばの説明は大村はま(2004)よりも、大村はま(2005)の方が詳しい。

### 2. 「教室で、私はこどもがかわいいなんて思ったことはありません。」(p.74)

自身の実習経験を振り返ると、このことばは怖いくらいに当てはまる。実習中、こどもをかわいいと思う余裕は全くなかった。指導教官からも、「嫌われてもいい。成長させるのが教師の仕事。」と何度も指導をいただいた。

大村は子ども達の未来を思っただけの必死さだったのに対して自身は初めて現場に立つ余裕のなさからの必死さであった。とはいえ、必死になっているときにそんなことを思う余裕なんてないことは共通しており、それが自身にひっかかった。

また、実際の現場では、中一で指導される内容が中三になっても身についていないという実態がある。(例：＜三角ロジック＞, 舟橋秀晃;2018;245)

今年度から学校に就職した同期の友人らは皆「子どもがかわいいから頑張れている」というが、もしかすると我々に子どもをかわいいと思うような余裕はないのかもしれないと考えさせられた。

### 3. 「自然に背筋が伸びるようにするのが技術です。」(p.82)

このことばを読んだとき、岩下修(1988)の「AさせたいならBと言え」を思い出した。また、これは宇佐美寛(2010)の「学習者には、目的ではなく、方法を教えるのである。それによって、自ずから、結果として目的が実現する。」(p.48)にも通じる。

このことばは、教師は尊敬されるべき職業であると信じる大村が大事にしているものの一つである。

大村(1973)は、「〇〇しなさい」という指示を「素人でも言える」(p.93)と言う。そんな大村はどうしたら〇〇できるのかを教えようと努めた。それがこのことばに表れている。

行動主義が主流の昭和初期に、現在の社会的構成主義に基づく学習観にもつながる大村の鋭い教育観に、ただただ感心させられるばかりである。

この言葉から学びを得たわけではないが、大村の偉大さはこのことばにあるように思われる。

## 出典・参考文献

- 岩下修(1988)『AさせたいならBと言え；心を動かす言葉の原則』明治図書
- 宇佐美寛(2010)『シリーズ『大学の授業実践』作文の教育；＜教養教育＞批判』東信堂p.48
- 大村はま(1973)『教えるということ』共文社 p.93
- 大村はま(2004)『灯し続けることば』小学館 pp.25-28
- 大村はま(2005)『忘れえぬことば』小学館 p.16.74.82
- 舟橋秀晃(2018)『言語生活の拡張を志向する説明的文章学習指導；「わからないから読む」行為を支えるカリキュラム設計』溪水社 p.245